
久音と美囊の事件簿

ていく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

久音と美囊の事件簿

【Nコード】

N2561BA

【作者名】

ていく

【あらすじ】

久音と美囊の難解な関係のお話……。

「やあ。元気かい美濃？」

「ええ、まあ元気ですよ。久音さん」

「そうかい？じゃあ美濃君には、大事な仕事を任せようか」

そういうと彼はくつくつくと笑って手に持ったグラスをテーブルに置いた。カツンと固い響きが部屋にこだまする。それよりこの笑い方はなんとかならないのか。正直耳障りだ。うざいし。

「じゃあ、そこにあるスケジュール帳に仕事内容が書いてあるからさ。しっかりと読んでおいてくれたまえ。では寝るお休み起こすなよ」
そう言っつて私を一瞥すると、すやすやと眠った。自由人だな。

「面倒だ……」

スケジュール帳を取り上げ、ページを開いてみる。そこには

「東京郊外にて事件発生！解決は頼んだ」

回りくどい人間だな。そう言っつと、私は立ち上がる。

この魔法が使える世界で起こる事件なんて大半が魔法が関わって行く。それに反して、魔法が関わらない事件となると、魔法で解決する事も出来ない。魔法だっつて万能じゃないのだ。そこで私たちの出番がある。

「久音探偵事務所の美濃だ。失礼する」

とある民間で起きた殺人事件。1日一件は起こるといふ猟奇的殺人犯の反抗だ。趣味が悪い。

「彼はやはり？」

「ええ、首を吊られており、小指が千切られています」

「そうか……………」。

顎に手を据えて考えこむ。

なぜ、小指なのだろうか。これまで同じ殺人犯と推測される事件は、すべて小指が千切られている。

ただの趣味が悪い殺人犯っていう訳だけじゃ無さそうだ。なにかルールに乗っ取った殺人がされている……………。

「ええ、ではまずここからは引き上げましょう。大体の犯人の目安もついていますし、逮捕するのも時間の問題でしょう」

「そうか……………」

また、今日も一つ命が無くなるのか……………。そんな気だるさを振り払い身を起こす。この事件に関わり一週間。毎日のように続いていた。

「美濃？どうしたんだ浮かかない顔して。ああ、事件が上手くいってないんだね？気にすることは無いよ。出来ればさっさと片付けてくれるとありがたいけどね」

平坦で抑揚のない、久音の声が聞こえる。耳障りな笑い声も。

ふう……………と息をつき、立ち上がる。今日も調査だ。彼は寝るお休み起こすなよと言い、眠ってしまわれた。そのままのむしになってしまえ役立たず！とまでは言わなかったが。

ブルルルと刻みの良い電子音が懐のポケットから鳴り出す。相手は昨日話をした刑事からだった。

「はい」

「美濃さん、犯人が動き出しました」
なに？と言葉を返してやる。そのままジャケットを羽織り、ドアを開けて外に出ていく。彼が薄目でこっちを見ていたようだが、気にしない。

「美濃さん。これは、現行犯ですね」

「は？」

「いえ、ですからまだ殺人は行われず、犯人は人質を拘束し立てこもっています」

「そうか。なら突破するのか？」

ええ。と、彼は頷くと、手を出して招いてきた。どうやら私も突撃メンバーの一員らしい。

しかし犯人たちからの連絡はいまだに出てこない。これはどうということなんだろうか？

「では行くぞ。3、2、1」

バン！と裏口から侵入していく。犯人一味はどこだろうか。手にした銃を抱えて一目散に走り込む。一つ一つの部屋を開け放ち、隅々まで見て回る。

二階で、パアンパアンと乾いた音がした。ゴロゴロゴロツと何か転げ落ち、家が少し揺れる。刑事の部下だった。

「おいッ、大丈夫かッ！」

「ぐっ……………」

情けない声を出し、苦しそうに悶える。

「このやるっツ……………！」

怒りをぶつけるようにおもいつきり立ち上がる。そして彼も二階へ駆け上る。彼の部下たちもそれに続いた。

パンパンツ……………

ズドドド……………

銃声のみが響いている。そして、一人、また一人、また一人と順番に落ちてきた。眉間には銃弾の穴が空いている。

「あ、うあああ……………」

怖い。恐怖。しかも女が見るような光景なんかじゃない。

階段したの廊下のフローリングは血に赤く染まってきた。

目の前で殺しが行われているのに正常になれるはずなんて無かった。

「あ、ああ」

ガタガタと足音が聞こえる。刑事さんはもう全滅した。いうまでもなく犯人達だろう。

シャツとナイフを鞘から抜き出す。死体の手にナイフを引っ掛けると思いい切りよく切る。小指がもげた。

「おい、お前」

「わ、わ、私？」

「そうだ。大人しくするんだ。そうすれば命までは奪わない。ほらこちらにくるんだ。」

「あ、うっ」

涙がでてきた。どうしても怖くて怖くて。誰か助けてくれないだろうかと。こんなときに彼がいれば……………。

「ここでじっとしている」

つれてこられたのは、二階の部屋だ。

「見ている」

すると彼はダンスやら引き出しから小指を取り出す。

「何故そんなところからそれが出てくるんだ？つて顔してるな。そりゃここが俺の部屋だからだ」

「つ、つまり私たちを騙して、誘き寄せたの」

「そういうことだ。それとなア、この小指たちは魔方陣を作るためにあるのさ！」

「まさか……」

人の小指や体の一部を使って魔方を使うということは、魔法の禁忌であり、さらには最強の魔法を使うことになる。

間違いなく国一つは百人程度の小指があれば吹っ飛ぶのだ。

「あはははッ。こいつでなア、この忌々しい世界を吹っ飛ばすのさア！」

死んでしまおう。そう思った。

「吹っ飛ばす？そいつあ無理じゃないかい？君は魔法を勉強したのかい？」

「んなッ？」

ああ……久音だ。無駄に抑揚の無い声が頼りに聞こえてしまう。しかしそんな希望も一瞬で砕かれてしまおうが。

「しかも美濃。君も君だよ。こんな簡単なミッションをノーダメージクリア出来ないのかい？君の顔に傷がついたら僕が悲しいんだよ。僕に心配させないでくれ。後でお仕置きだ」

ああこんなところで自由人を発揮してる……無駄なのはいらぬのに。

「さて、一発の銃弾が有るんだ。こいつを後始末に使おうか」

そう言っつて、銃口を彼に……

ではなく私に向かって打ち出す。

彼は、ひっ、とかわいい悲鳴を出したがそんなの気に止めることすら出来ない。

全身の剃ったばかりの毛が、毛穴ごと逆立つような感覚。

「美濃、これがお仕置きだ。獣になるのも悪くないだろう?」

彼がそんなこと言っている間にも、体は蝕まれていく。程なくして狼のように毛は逆立ち、しっぽまで生えていた。忠実なこと。

「さあ、君は何人も人間を殺したんだ。生き地獄を見たってだれも何も言わないんだ。ほら、美濃。食べていいよ」

パウツと吠えた狼はパクつと彼を一息で体内に彼を放り込むと、魔法が溶け初め、もとの美濃の形に戻っていった。

「あ、あの、久音さん?」

「なんだい美濃くん」

「さっきの彼は……………」

「ああ、まだ君の体内だよ。今頃胃液で苦しんでるんじゃないかなあ……………なんて冗談だからそんな顔しないで?」

「つまり?」

「魔法の陣書けば出てくるよ。君の体内には居ないから安心して」

「そうなんですか……………」

「ああ、大体君の体内にそんなの入れたら僕が消してやるから安心してな」

「でも久音さん私を獣にしたじゃないですか」

「あーあれはまあ」

「まあじゃないでしょう!」

「しょうがなくやったのだよ!」

その後、彼は魔方陣から呼び出されると真つ直ぐに刑務所に連れていかれた。彼なりに国を吹っ飛ばす理由もあつたのかも知れないが、そんなことで吹っ飛ばされてちゃ国が持たない。

「久音さんはコーヒーですか?」

「いや、君で
バキンッ

「ぐふっ。あの、お盆で殴らないでくれないか……」
「ふんっ」

回りくどい人間だな。そう言うと、私は立ち上がる。

探偵というのは比較的楽な仕事だと私は思う。

事件が入らなきゃならならしていられるし。

その点、事件が入るのは面倒だ。……まあそれが無くては明日まで
食えないのだが。

私は正確に言うとは探偵では無い。いわば助手のようなものだ。

事件をひとつくらいしか解決してはいないので、まだ独立もできて
いないのだが。

私のプロフィール？知ってどうするんだ……。

梶原美羽かじはらみほ身長165センチ、体重45キロ。まあ女性としては標準
だろう。

ああ、職業は

魔法探偵だ。

魔法が使われた事件ならばいつでもござね、というわけだ。
今日も事件が始まる。

(後書き)

ちよつとだけ、がんばって書きました！
面白いと思ってくださったら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2561ba/>

久音と美囊の事件簿

2012年1月6日16時52分発行